宮崎市文化財調査報告書　第70集

かた　せ　ばる　い　せき

片瀬原遺跡

特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

片瀬原遺跡全景（東より）

２００８

宮　崎　市　教　育　委　員　会

序

宮崎市教育委員会では、特別養護老人ホーム「松晃園」建設に伴い、宮崎市佐土原町下那珂字片瀬原に所在する片瀬原遺跡の発掘調査を行いました。

今回の調査面積は60㎡ではありますが、竪穴住居跡が６棟検出され石崎川右岸で集落が存在していた事が分かりました。遺跡近くを流れる石崎川の両岸には弥生時代の集落である下那珂遺跡、中溝遺跡などが存在し、古来より石崎川の近くで人々が暮らしていた情景が思い起こされます。

今後、本報告書が地域史解明の一助となり活用されますと共に、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成20年３月

宮崎市教育委員会
教育長　　田　原　健　二

例　言

1．本書は、特別養護老人ホーム松晃園移転に伴う片瀬原遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査は宮崎市教育委員会が平成19年6月4日から平成19年6月22日までの期間実施した。また整理作業は、平成19年9月19日から平成20年3月31日までの期間実施した。

3．発掘調査によって出土した遺物及び調査における図面・写真等は、宮崎市教育委員会で保管している。

4．調査組織

調 査 主 体	宮崎市教育委員会
文化振興課	課長　野田清孝
調 査 総 括	主幹兼文化財係長　山田　典嗣
調 査 事 務	主任主事　吉永　大介
調 査 担 当	技師　河野　雅人
補　助　員	嘱託　永友　加奈子
	嘱託　徳丸　理奈

5．本書で使用した遺構略号は、以下の通りである。
ＳＡ：竪穴住居跡　ＳＣ：土坑　ＳＥ：溝状遺構　ＳＨ：ピット

6．現場及び遺物の写真撮影は、河野が行った。

7．現地での写真撮影等の記録は主に河野が行った。その他、発掘調査期間中に多くの文化振興課職員・調査員が遺構実測に加わった。実測者は以下の通りである。
稲岡洋道・井上誠二・金丸武司・竹中克繁・藤木晶子（五十音順）

8．掲載した図面のうち、遺物の実測は河野・永友・徳丸が整理作業員とともに行った。

9．本書の執筆・編集は河野が行った。

10．出土遺物および掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 1

第Ⅱ章　調査経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 4
　第２節　当該地における埋蔵文化財の取り扱い …… 4
　第３節　調査の経過 …… 4

第Ⅲ章　調査の成果
　第１節　基本層序 …… 6
　第２節　調査の記録 …… 6

第Ⅳ章　まとめ …… 17

挿図目次

第１図　周辺地図① …… 2
第２図　周辺地図② …… 3
第３図　片瀬原遺跡・遺構配置図 …… 5
第４図　１号竪穴住居跡（ＳＡ１）実測図 …… 6
第５図　２・３・４号竪穴住居跡及び４号土坑（ＳＡ２・３・４、ＳＣ４）実測図 …… 7
第６図　２・３・４号竪穴住居跡（ＳＡ２・３・４）土層断面図 …… 8
第７図　４号土坑（ＳＣ４）実測図及び土層断面図 …… 8
第８図　３号竪穴住居跡（ＳＡ３）埋甕平面図及び見通し断面図 …… 9
第９図　５号竪穴住居跡（ＳＡ５）実測図 …… 9
第10図　６号竪穴住居跡（ＳＡ６）実測図 …… 10
第11図　片瀬原遺跡出土遺物実測図① …… 12
第12図　片瀬原遺跡出土遺物実測図② …… 14

図版目次

図版１～４　現場調査 …… 18
図版５～26　遺物写真 …… 20

表目次

表１　片瀬原遺跡出土土器観察表 …… 15
表２　片瀬原遺跡出土土器観察表 …… 15
表３　片瀬原遺跡石器及び土錘計測 …… 16

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と環境

片瀬原遺跡は、宮崎市佐土原町下那珂字片瀬原に所在し、石崎川右岸の標高約11mに位置する。片瀬原遺跡が所在するこの地域一体は宮崎平野の一部であり、この平野は沖積低地と丘陵から形成されている。沖積低地は下田島面群と呼ばれる完新世段丘面、砂堤、砂丘、氾濫原などから構成され、下田島面群は海成で高位からⅠ～Ⅳ面に分かれる。

片瀬原遺跡はこの下田島Ⅰ面上に立地し、南西約200mの地点には西片瀬原遺跡（弥生時代後期後半）が所在する。この遺跡では袋状口縁壺形土器が出土している。また、周辺には中溝遺跡（弥生時代）、下ノ山遺跡（弥生時代～中世）、下山遺跡（古代～中世）、伊賀給遺跡（弥生時代～中世）が所在する。中溝遺跡では竪穴住居跡１・土坑１が検出され、弥生時代後期初頭の土器が出土している。胴部に一条の突帯を施し、底部が上げ底になる中溝式と標識設定されているものである。また、伊賀給遺跡では弥生時代～中世の水田跡が検出されている。

石崎川左岸の城ヶ峰台地には下那珂貝塚（縄文～弥生）、下那珂遺跡（旧石器～弥生）、広瀬城ヶ峰横穴群（古墳時代後期）が所在する。下那珂貝塚は昭和42年に飛鳥の文様が描かれた弥生土器が発見されている。下那珂遺跡は平成11年から平成13年にかけて三次の調査が行われ、丘陵上に弥生時代後期から終末期の竪穴住居跡が120軒検出され、虺龍文鏡片が出土している。また、県内ではトップクラスの石包丁の出土数を誇る。

城ヶ峰台地の北方には土器田横穴群（古墳時代）や小牧遺跡（中世～近世）が所在する。土器田横穴群は計７基の横穴が調査され、その内土器田東１号横穴墓の玄室では線刻壁画が描かれ奥壁には、イルカなどの線刻とその下部に連続三角文が線刻され、内部に朱痕が見つかっている。

城ヶ峰台地の西の丘陵には、下那珂馬場古墳（古墳時代）・堤下遺跡（弥生時代）が所在する。堤下遺跡では周溝状遺構が検出されており、弥生時代の祭祀の場と想定されている。

片瀬原遺跡の南西には、保木下遺跡（弥生時代～中世）・住吉古墳群（古墳時代）が所在する。住吉古墳群は前方後円墳が３基確認されていたが、現在は住吉１号墳のみが現存している。

このように、片瀬原遺跡の周辺には弥生時代以降の遺跡が多く存在する。弥生時代には周辺の標高の低い地域は離水し湿地となっていたと想定され、それを生産基盤としていた集団の存在を思い起こさせる。

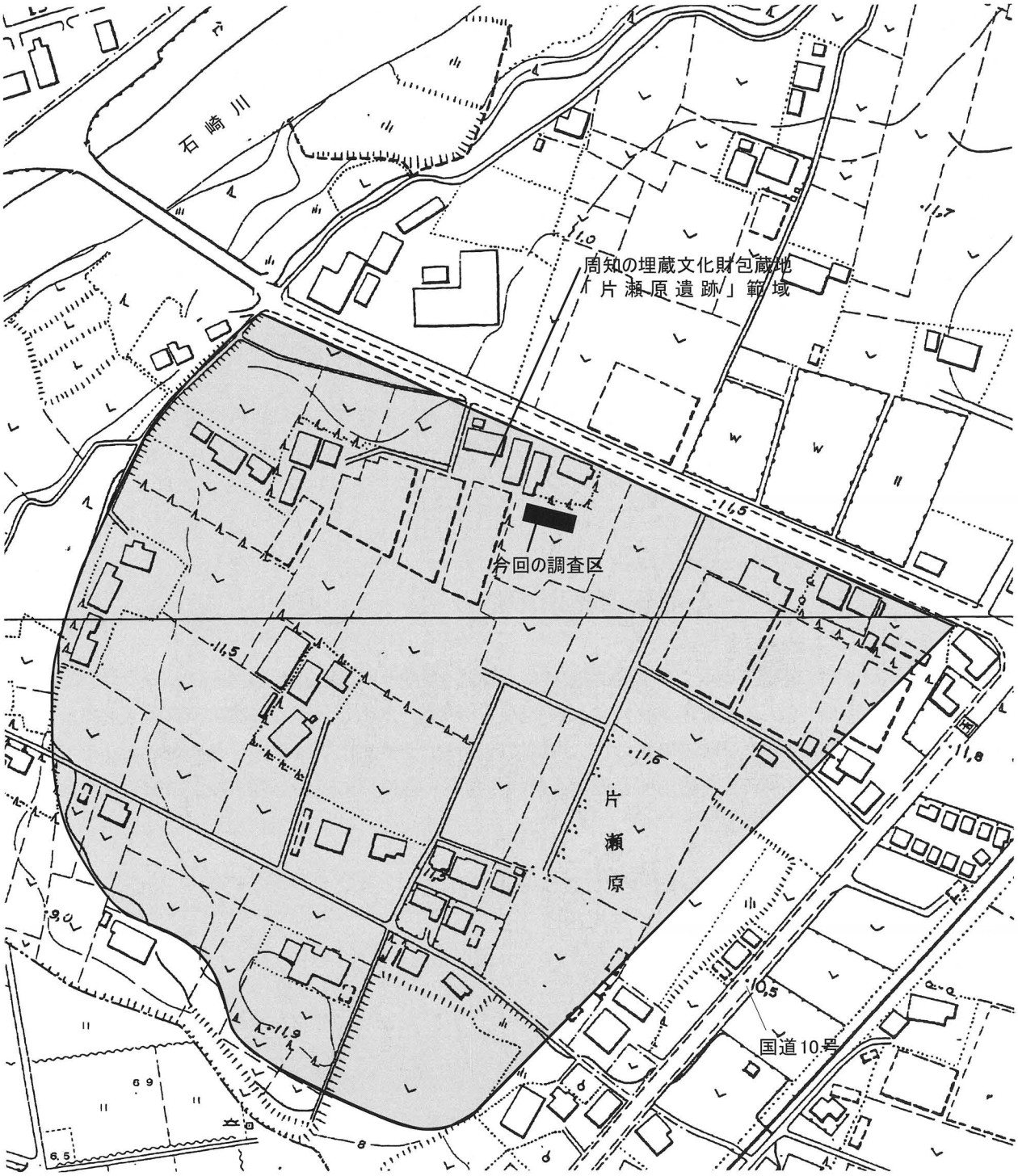
なお、宮崎県史　資料編　考古２において紹介されている西片瀬原遺跡は、佐土原町遺跡詳細分布調査報告書では片瀬原遺跡の範域に含まれており、周辺地図では片瀬原遺跡として取り扱う。

【参考文献】

宮崎県　『宮崎県史』　資料編　考古1　1989
宮崎県　『宮崎県史』　資料編　考古2　1993
宮崎県　『宮崎県史』　通史編　原始・古代1　1998
宮崎県埋蔵文化財センター　「下那珂遺跡」　『県総合農業試験場本場果樹園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第90集』　2004

第１図　周辺地図①（Ｓ＝１／20,000）

１．下之山遺跡	６．下那珂遺跡	11．住吉古墳群
２．小牧遺跡	７．保木下遺跡	12．下那珂馬場古墳
３．下山遺跡	８．土器田横穴群	13．下那珂貝塚
４．堤下遺跡	９．広瀬城ヶ峰横穴群	14．片瀬原遺跡
５．伊賀給遺跡	10．中溝遺跡	



第２図　周辺地図②（Ｓ＝１／2,000）

第Ⅱ章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

平成18年12月6日、社会福祉法人一寿会理事長[redacted]より特別養護老人ホーム建設に伴い、宮崎市佐土原町下那珂字片瀬原における埋蔵文化財の有無について、宮崎市教育委員会教育長宛に照会がなされた。当該地には周知の埋蔵文化財包蔵地である「片瀬原遺跡」が所在するため、平成18年12月22日（金）～平成19年1月11日（木）に掛けて確認調査を実施した（計8日間）。調査は、バックホーを使用し計21本の確認トレンチを設定した。結果はその内容から北区、南区、東区に分けられる。北区では溝跡・ピットが検出され、土師器が出土した。南区では、住居跡・ピットが検出され、須恵器・土師器が出土した。東区では遺構・遺物は確認されていない。

この結果に基づき、宮崎市教育委員会では社会福祉法人一寿会と協議を重ね、再度地下浄化槽にかかる部分の確認調査を実施した。結果、住居跡・ピットが確認されたため、再び社会福祉法人一寿会と協議を行い地下浄化槽部分60㎡を対象として本調査を行うこととした。

第２節　当該地における埋蔵文化財の取り扱い

周知の埋蔵文化財包蔵地である「片瀬原遺跡」は、現在、畑地や宅地として利用されている標高約12m前後の沖積低地に所在する。事業対象地を便宜上、北区、南区及び東区と分割し事前に確認調査を実施した結果、北区及び南区では遺構、遺物が確認され、東区では削平により文化財は確認されなかった。その後協議の末、現状保存箇所と発掘調査実施箇所を設け、遺物包含層・遺構面に達する地下浄化槽部分を現地における発掘調査の対象とし、記録保存を行った。

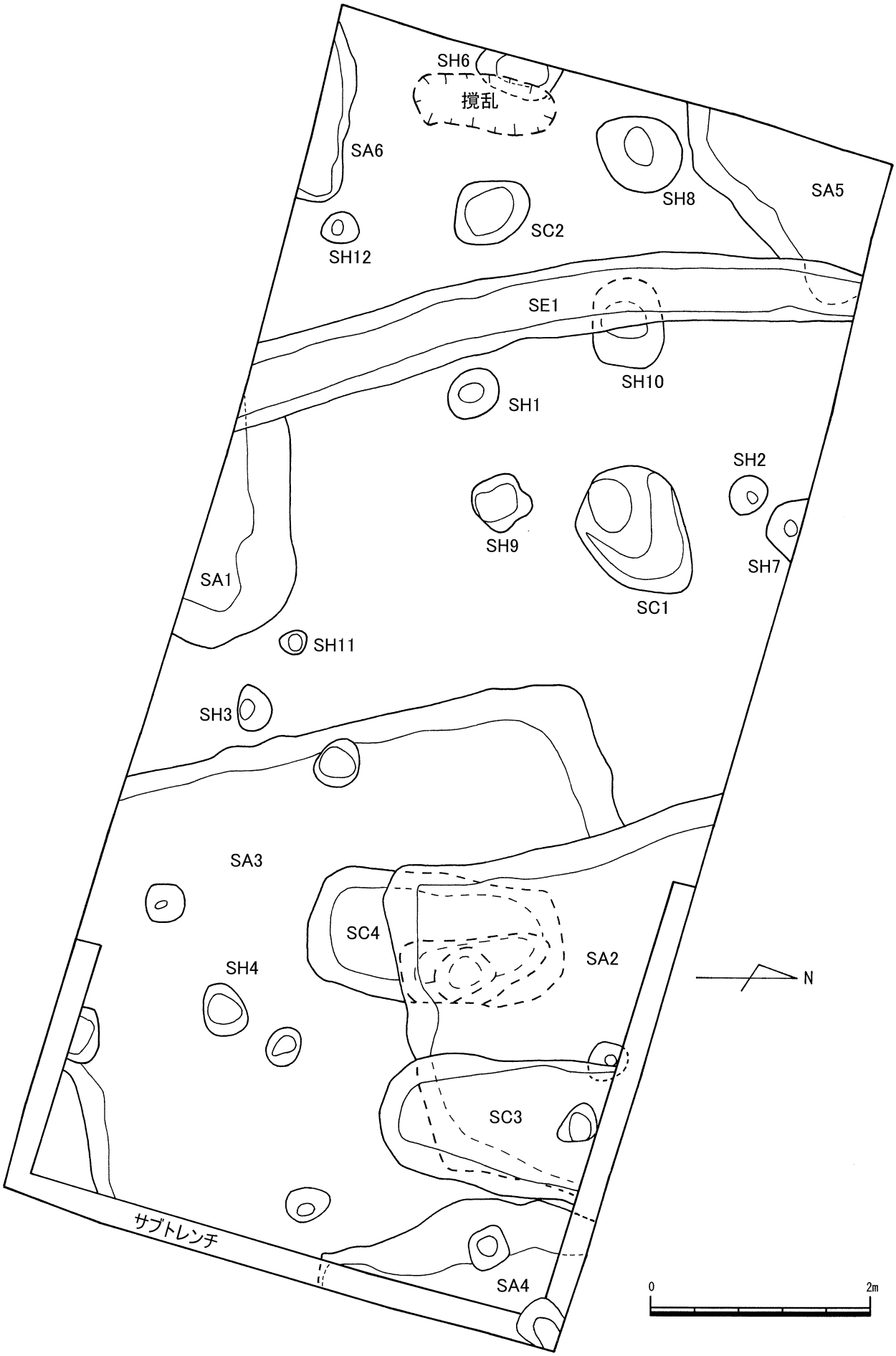
第３節　調査の経過

片瀬原遺跡は、もともとは畑地であったが、調査時は雑草の繁茂する荒蕪地であった。平成19年4月25日に行った確認調査の結果、住居跡・ピットが検出された。

調査は、地表面より１m以上掘り下げた状態で行った。砂地であったため水はけは良かったものの、それ以上に乾燥が激しく水を撒きながらの遺構検出・調査となった。また、埋土が近似している竪穴住居跡が切りあっており、検出は困難であった。

調査の結果、竪穴住居跡６軒・土坑２基・溝状遺構１条・ピット22基が検出された。調査区西側で検出されたピットの内２基は当初土坑と考えていたが、ピットとの位置関係を考えた場合ほぼ等間隔に位置しており掘立柱建物の可能性があるため、ピットと考える方が妥当と思われる。

現地調査終了後、整理作業は、平成19年9月19日から平成20年3月31日までの期間実施した。



第３図　片瀬原遺跡・遺構配置図（Ｓ＝１／50）

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　基本層序

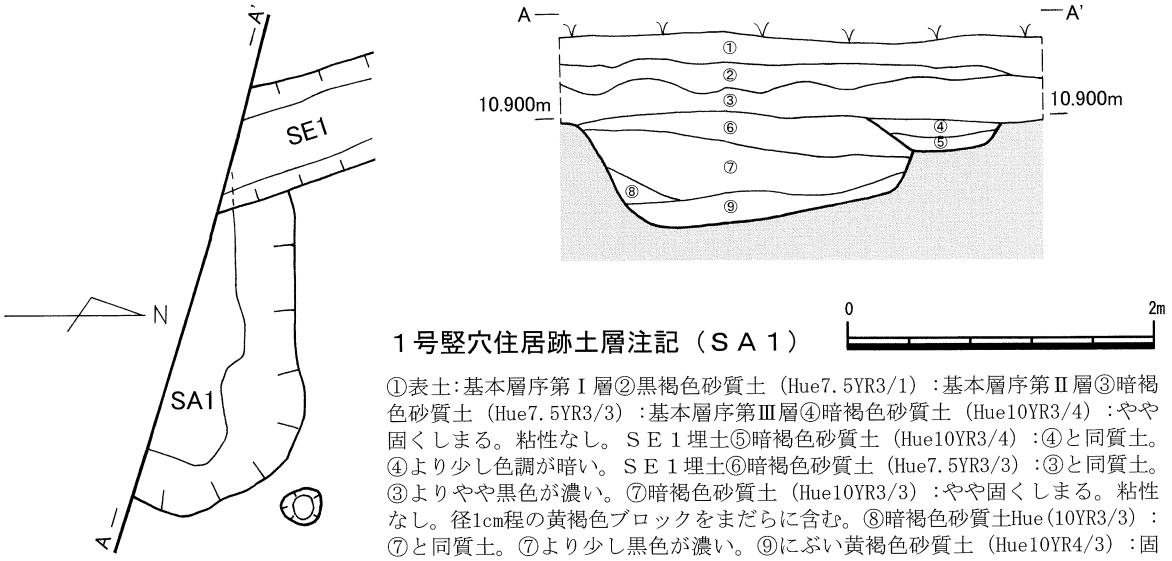
片瀬原遺跡における基本層序は、Ⅰ層表土（20ｃｍ　遺物番号15)、Ⅱ層黒褐色砂質土（10～15ｃｍ　やや固くしまる　粘性弱　高原スコリアをまだらに含む　トラクターによる攪拌が激しい　遺物番号16～33)、Ⅲ層暗褐色砂質土（15ｃｍ　やや固くしまる　粘性なし　遺物番号34～48)、Ⅳ層褐色砂質土（15ｃｍ　やや固くしまる　粘性なし)、Ⅴ層青灰色砂（15ｃｍ以上　固くしまる　粘性なし）となり、Ⅰ・Ⅱ層が客土、Ⅲ層が遺物包含層、Ⅳ層が遺構検出面である。

第２節　調査の記録

遺構について

１号竪穴住居跡

調査区のほぼ中央南端に位置する。北東コーナーと北壁を検出したのみで、大部分は調査区外に延びており平面形態・規模等は不明である。遺構の深さは最大0.7ｍで、青灰色砂層まで掘り込んでいる。柱穴は確認できなかった。遺物は数点が埋土中から出土したのみである。ＳＥ１に北壁を切られている。



１号竪穴住居跡土層注記（ＳＡ１）

①表土:基本層序第Ⅰ層②黒褐色砂質土（Hue7.5YR3/1）:基本層序第Ⅱ層③暗褐色砂質土（Hue7.5YR3/3）:基本層序第Ⅲ層④暗褐色砂質土（Hue10YR3/4）:やや固くしまる。粘性なし。ＳＥ１埋土⑤暗褐色砂質土（Hue10YR3/4）:④と同質土。④より少し色調が暗い。ＳＥ１埋土⑥暗褐色砂質土（Hue7.5YR3/3）:③と同質土。③よりやや黒色が濃い。⑦暗褐色砂質土（Hue10YR3/3）:やや固くしまる。粘性なし。径1cm程の黄褐色ブロックをまだらに含む。⑧暗褐色砂質土Hue(10YR3/3）:⑦と同質土。⑦より少し黒色が濃い。⑨にぶい黄褐色砂質土（Hue10YR4/3）:固くしまる。粘性なし。径1cm程の褐色ブロックをまだらに含む。貼床土と思われる。⑩褐色土(Hue7.5YR4/6):基本層序第Ⅳ層

第４図　１号竪穴住居跡(ＳＡ１)実測図（Ｓ＝１／50)

２号竪穴住居跡

調査区のほぼ北東に位置する。遺構埋土の色調が３号竪穴住居跡と酷似していたが、南辺と西辺及び東辺の一部を検出した。北辺が調査区外のため全容は不明であるが、平面形態は南辺と西辺を基に考えると、長方形になると思われる。調査区北壁付近で焼土粒が確認できたため竈などの火処の存在も考えられたが、検出されなかった。床面では直径約20ｃｍのピットが２基検出されたが、深さが浅い。遺物は埋土中と床面直上から出土した。３号竪穴住居埋没後に構築された遺構である。

３号竪穴住居跡

調査区の東半に位置する。２号・４号竪穴住居跡及び３号土坑に切られていたが、北西コーナー・南西壁の一部・南東壁の一部を検出した。南西コーナーが調査区外にあるため、正確な平面形態・規模等は不明だが、おおよそ一辺5.6mと思われる。また、青灰色砂層まで掘り込んだ後に砂を用いて厚さ約10cmの貼床を施している。ピットは５基検出されたがいづれも深さが浅く、配置に規則性が見られない。遺物は、埋土中からと床面直上から出土した。

また、この３号竪穴住居跡には埋甕が付設していた。

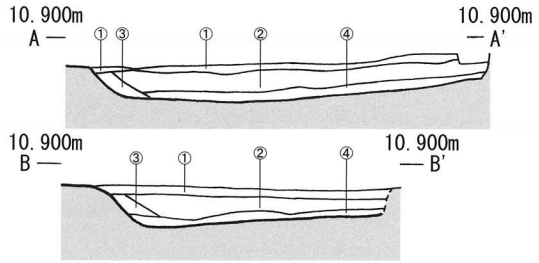
４号竪穴住居跡

調査区北東隅に位置する。南西壁の一部と南西コーナーを検出したのみで、大部分は調査区外に延びており平面形態・規模等は不明である。南西壁はなだらかに下り、床には厚さ約20cmの貼床を施していた可能性も考えられる。遺物は出土していない。ピットを２基検出し、調査区の北東角のピットは深さ約80ｃｍだった。ピット内から遺物は出土していない。

４号土坑

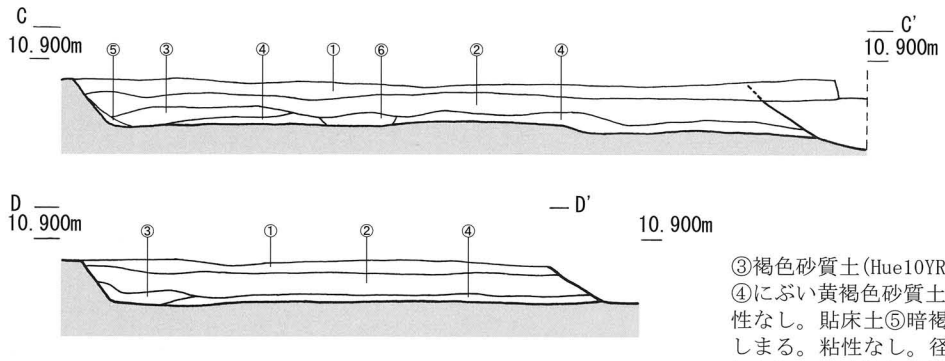
規模は2.4×1.2m、深さ0.2mで上層に遺物を多く含んでいたが、下層に向かうに従い出土しなくなった。掘り込みは浅く出土した土器も破片が多い。３号竪穴住居跡の貼床面から掘り込んでいるため、住居廃絶後に掘られたものと思われる。

第５図　２・３・４号竪穴住居跡及び４号土坑（ＳＡ２・３・４，ＳＣ４）実測図（Ｓ＝１／50）



２号竪穴住居跡土層注記（ＳＡ２）

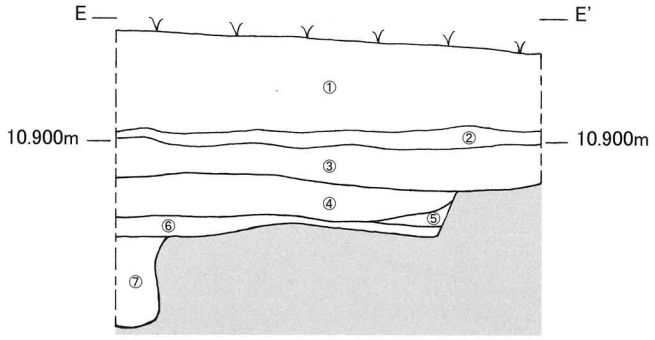
①暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3)やや固くしまる。粘性なし。②暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。径５mm程の黄褐色ブロックをまだらに含む。③暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4):②と同質土。②よりやや黒色が濃い。④黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/2):やや固くしまる。粘性なし。



３号竪穴住居跡土層注記（ＳＡ３）

①暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。②暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4):①と同質土。①よりやや黄色味がかる。

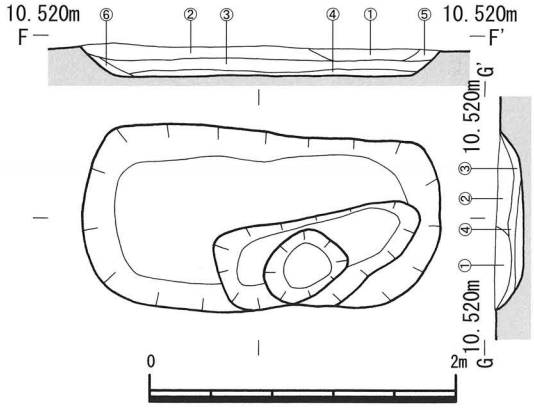
③褐色砂質土(Hue10YR4/4):やや固くしまる。粘性なし。④にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。貼床土⑤暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。径１cm程の黄褐色ブロックをまだらに含む。⑥暗褐色砂質土(Hue10YR3/3):やや固くしまる。粘性なし。⑦黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/1):やや固くしまる。粘性なし。⑧暗褐色砂質土(Hue10YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。



４号竪穴住居跡土層注記（ＳＡ４）

①表土:基本層序第Ⅰ層②暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3):やや固くしまる。粘性なし。③暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3):②と同質だが、径１cm程の褐色ブロックをまだらに含む。④暗褐色砂質土(Hue10YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。⑤暗褐色砂質土(Hue10YR3/3):やや固くしまる。粘性なし。⑥褐色砂質土(Hue7.5YR4/3):やや固くしまる。粘性なし。灰白色ブロックをまだらに含む。貼床土と思われる。⑦にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR4/3):やや固くしまる。粘性なし。

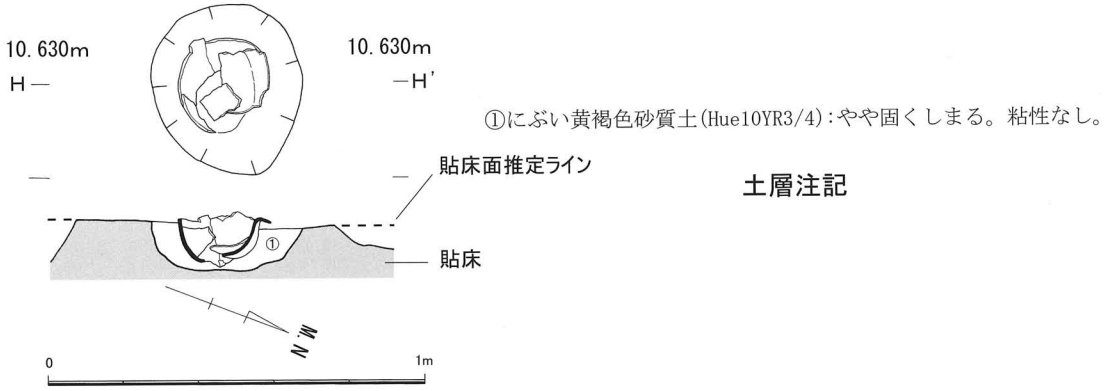
第６図　２・３・４号竪穴住居跡（ＳＡ２・３・４）・土層断面図（Ｓ＝１／50）



４号土坑土層注記（ＳＤ１）

①黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/1):やや固くしまる。粘性なし。炭化物をまだらに含む。②褐色砂質土(Hue7.5YR4/3):やや固くしまる。粘性なし。③褐色砂質土(Hue7.5YR4/3):②と同質土。②よりやや黒色が濃い。④にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR4/3):やや固くしまる。粘性なし。⑤暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。⑥暗褐色砂質土(Hue10YR3/3):やや固くしまる。粘性なし。

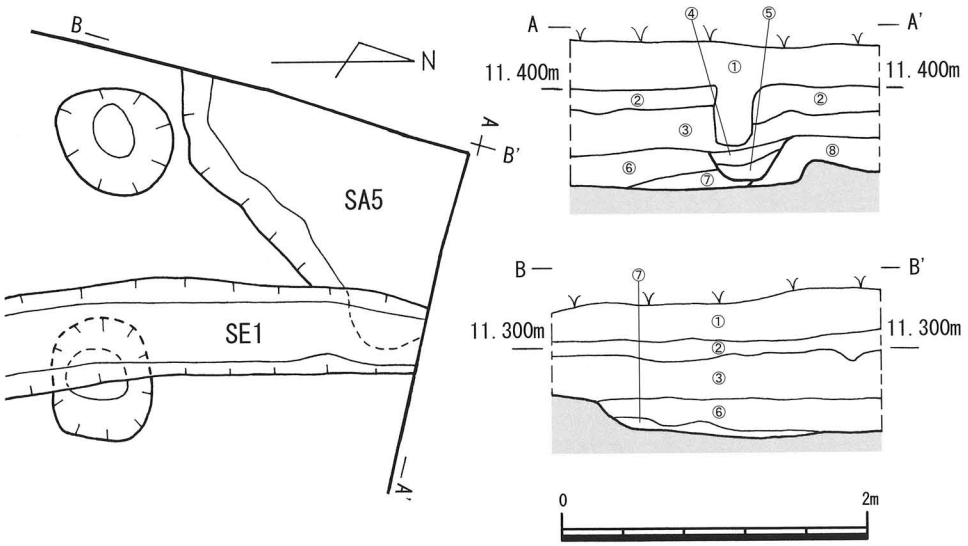
第７図　４号土坑（ＳＣ４）実測図及び土層断面図（Ｓ＝１／50）



第８図　３号竪穴住居跡（ＳＡ３）埋甕平面図及び見通し断面図（Ｓ＝１／20）

５号竪穴住居跡

調査区の北西隅に位置する。１号溝に切られている。南西コーナーと南東壁の一部を検出したのみで大部分は調査区外に延びており平面形態・規模等は不明である。遺構の深さは0.2～0.25mで比較的掘り込みは浅かったが、床面が平らであったため住居跡とした。柱穴は検出されていない。遺物も出土していない。



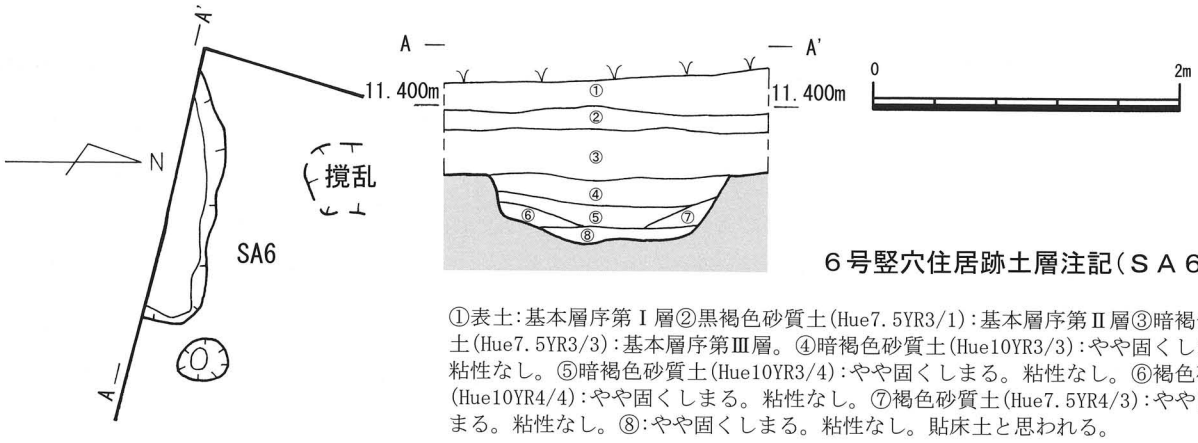
５号竪穴住居跡北壁・西壁土層注記（ＳＡ２）

①表土:基本層序第Ⅰ層 ②黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/1):基本層序第Ⅱ層③暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3):基本層序第Ⅲ層。④暗褐色砂質土(Hue10YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。ＳＥ１埋土⑤暗褐色砂質土(Hue10YR3/4):④と同質だが、④より少し色調が暗い。ＳＥ１埋土⑥暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3):③と同質だが、③より少し黒色が濃い。ＳＡ５埋土⑦褐色砂質土(Hue7.5YR4/4):やや固くしまる。粘性なし。貼床土の可能性あり。ＳＡ５埋土⑧褐色砂質土(Hue7.5YR4/6):やや固くしまる。粘性なし。

第９図　５号竪穴住居跡（ＳＡ５）実測図（Ｓ＝１／50）

６号竪穴住居跡

調査区の南西隅に位置する。北東コーナーと北壁の一部が検出されたのみで、大部分は調査区外に延びており平面形態・規模等は不明である。遺構の深さは0.4mで青灰色砂層まで掘り込んでおり、その上に厚さ５～10cmの貼床を施している。柱穴は検出されていない。遺物も出土していない。



６号竪穴住居跡土層注記（ＳＡ６）

①表土:基本層序第Ⅰ層②黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/1):基本層序第Ⅱ層③暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/3):基本層序第Ⅲ層。④暗褐色砂質土(Hue10YR3/3):やや固くしまる。粘性なし。⑤暗褐色砂質土(Hue10YR3/4):やや固くしまる。粘性なし。⑥褐色砂質土(Hue10YR4/4):やや固くしまる。粘性なし。⑦褐色砂質土(Hue7.5YR4/3):やや固くしまる。粘性なし。⑧:やや固くしまる。粘性なし。貼床土と思われる。

第10図　６号竪穴住居跡（ＳＡ６）実測図（Ｓ＝１／50）

１号溝

調査区の西半に位置し、北西から南東方向に延びる。１号及び５号竪穴住居跡を切っている。検出面での幅は0,60～0,69m、深さ0,21～0,37mで、遺物は小片数点が埋土中から出土したのみである。

１号土坑

調査区の西半に位置する。遺物は出土していない。規模は1.3m×0.95m、深さ0.5mで、当初は土坑と判断したが、ＳＨ８、ＳＨ10と一列に並ぶことから、掘立柱建物跡が想定されるため、ピットと考える方が妥当と思われる。

２号土坑

調査区の西半に位置する。遺物は出土していない。規模は0.7m×0.6m、深さ0.2mで、当初は土坑と判断したが、ＳＨ１、ＳＨ６と一列に並ぶことから、掘立柱建物跡が想定されるため、ピットと考える方が妥当と思われる。

３号土坑

調査区の北東隅に位置する。検出層位が違うため他の遺構と時期が異なると思われる。埋土からは土師器、須恵器、炭化物が多数出土した。下層に向かうに従い出土遺物は少なくなり、細片であった。

ピット（１～１２）

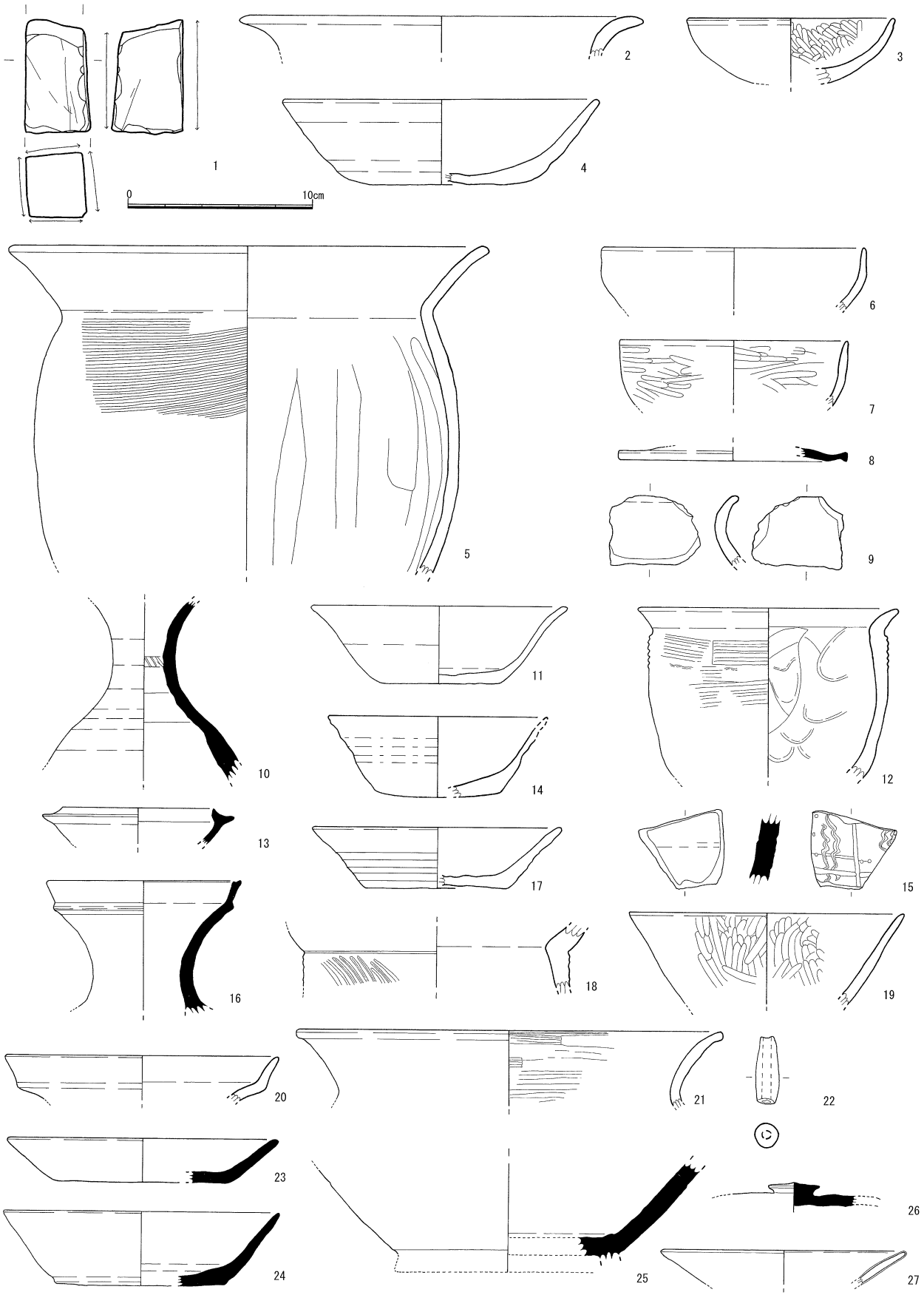
遺物が出土したのは、４号ピットのみであり、竪穴住居跡に伴うものではない。その他のピットから遺物は出土していない。調査区西側ではＳＣ１・ＳＨ10・ＳＨ８とＳＨ１・ＳＣ２・ＳＨ６が２列並び、掘立と考えられる。

遺物について

1～14は遺構出土の遺物である。1はＳＡ１出土の砥石である。両端が欠損しているが、残存する面で無数の擦り跡が４面すべてに残る。また、凹面状に窪んでいる。形状から柱状のプロポーションが想定できる。2～4はＳＡ２出土である。2は土師器甕で胎土に小石が目立つ。内面は部分的に黒変している。3は土師器坏で外面はナデであるが、内面に細かく丁寧なミガキを施している。4は土師器坏で内外面ともが風化しているが、底面でヘラ切り痕跡が確認でき、若干上げ底になっている。また、底面から胴部への立ち上がる部分で全周すると思われる若干の窪みを施している。5～9はＳＡ３出土である。5は土師器甕で埋甕として使用されていた。外面はハケ目を施した後に丁寧なナデを行っている。一方で内面は縦方向のケズリを行い整えている。胴部下位から底部を打ち欠き、口縁から胴部上位を残して使用している。埋甕に使用されていたと思われるが、内外面共に煤の付着はない。6、7は土師器坏である。6は内外面をナデているだけだが、7は内外面共に丁寧なミガキを施す。8は須恵器の坏蓋でかえり手前で一旦窪んだあと、端部を下方に折り曲げてつまんでいる。また、器壁は薄く天井部にはふくらみはないと思われる。9は土師器甕で内外面の調整はナデである。胎土で小石が目立つ。10～12はＳＣ３出土である。10は須恵器の長頸壺で焼成は良く、口縁部近くに自然釉がかかる。11は土師器坏で内外面の調整はナデである。底面はヘラ切りで、ロクロを使用したと思われる。12は土師器の小型甕で風化しているものの、横方向のハケ目が施されている。胎土には小石が目立ち、粘土の継ぎ目も確認できる。また、煤が部分的に付着している。口縁部の調整は丁寧である。13・14はＳＣ４出土である。13は須恵器の坏身で部分的に自然釉がかかる。また、内面の底部からたちあがりへの変化部分に沈線を施している。器壁も薄く、口径も推定8.2cmで小型である。中村編年Ⅱ-6型式か。14は土師器坏で、胴部の一部をケズリによって調整していると思われる。風化によりはっきりとは確認できないが、ヘラ切り底と思われる。

15はⅠ層出土の須恵器で、破片のため器種は不明だが、沈線、波状文、刺突文を施しており、類例を見ない調整である。

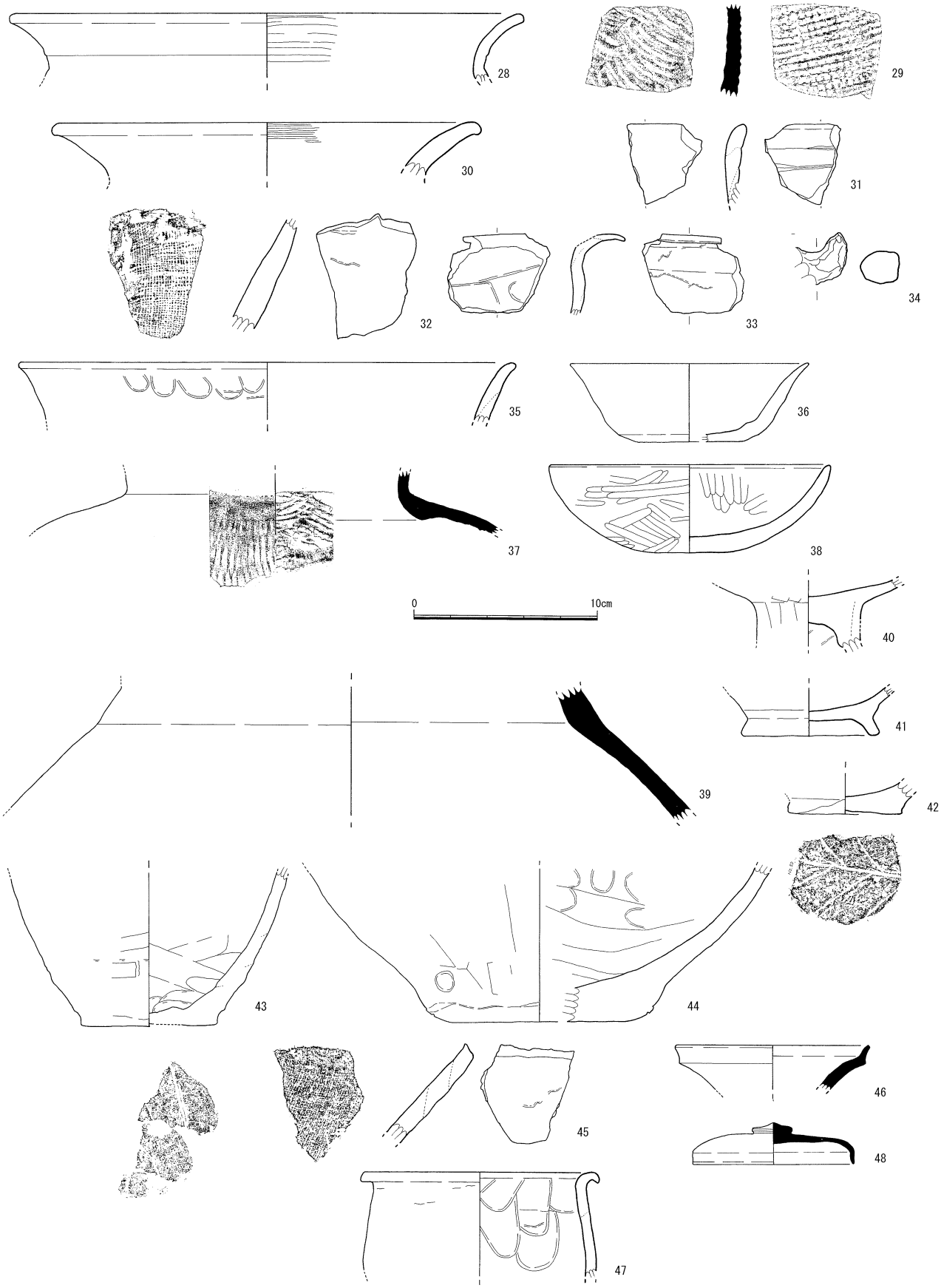
16～33はⅡ層出土である。16は須恵器の長頸壺で焼成は良く、口縁部に沈線を施す特徴を持つ。比較的大型の長頸壺である。17は土師器坏で表面は風化しているものの、外面では横ナデを確認できるがケズリを施している可能性もある。また、底面はヘラ切りで中央部に向かって若干窪んでおり、上げ底となっている。18は土師器甕で頸部しか残っていないものの、外面の頸部から胴部には斜方向の沈線、頸部には横方向の沈線を施している。また、胎土は当遺跡より出土した他の土師器と比較すると違いが見られる。19は土師器坏で、内外面に丁寧で細かいミガキを施している。また、内面は黒変しており、内黒であろう。20は土師器壺と思われる。一部に煤が付着している。21は土師器甕で、外面の口縁部直下を若干窪ませている。内面にはハケ目が確認できる。22は筒型の土錘で、穿孔を施した一方の面を平らに整えている。また、中央部が若干膨らむプロポーションである。23は須恵器皿と思われ、内外面で色調に違いが見られる。24は須恵器坏で、風化しているが内外面の調整はナデである。また、底面はヘラ切りである。外面の色調が白っぽく、生焼けの須恵器ではないかと思われる。25は須恵器高台付壺であるが、高台部を欠損している。自然釉が全体にかかっていたと思われるが、磨耗のためか底部と高台部の結合部分付近に見られるだけである。26は須恵器の坏蓋で天井部である。つまみ中央部が若干膨らんでいる。27は青磁の鉢である。28は土師器甕で内面にハケ目を施した後、ケズリをしていると思われる。また、外面の頸部に沈線を施している。29は須恵器甕である。



第11図　片瀬原遺跡出土遺物実測図①（S＝1／3）

外面はタタキで一般的な格子文であるが、内面の当て具痕は縄目の様な文様である。30は土師器甕で器壁が厚い。外面の調整はナデであるが、内面はハケ目を施したのちナデている。31は土師器甕であるが、粘土継ぎ目がはっきりと確認できる。長時間被熱を受けたためか、土器内部まで赤変している。32は土師器鉢で製塩土器である。外面は風化しているものの、内面には布痕がはっきりと残っている。土器自体の作りにも雑さが目立つ。33は土師器甕で胎土に小石が目立つ。また、厚みも他のものと比較すると少し薄い。

34～48はⅢ層出土である。34は土師甑の把手である。牛角把手と言われるものである。35は土師器甕で、外面の一部と内面には煤が付着している。36は土師器坏である。外面は風化しているものの底面から胴部への立ち上がる部分で全周すると思われる若干の窪みを施しているのが確認出来る。また、底面はヘラ切りである。37は須恵器甕で、内面で粘土継ぎ目を確認出来る。外面はタタキののちナデを施す。38は土師器椀である。焼成は良く内外面とも細かく丁寧なミガキを施し、光沢を放つ。39は須恵器大型甕で、外面には自然釉がかかる。また、内面には当て具痕は見られず、横ナデで頸部では光沢を放つ。40は土師器の高坏で坏受けの部分のみである。外面は工具によるナデを施している。内面はミガいてあるがミガキの痕跡はよくわからない。また、内面は部分的に黒変している。粘土の継ぎ目もはっきりと観察出来る。41は土師器椀で高台と底部しか残存していないが、丁寧なつくりで高台部を貼り付けた痕跡が確認できる。高台部は丁寧な回転ナデを施し、高台部の高さは0.9cmである。外面には煤が付着している箇所もあり、内面は黒変しミガいてあるがミガキの痕跡はよくわからない。内黒と呼ばれるものである。42は土師器甕で底部のみ残存している。底面は木葉痕で、葉脈も確認出来る。43・44は土師器甕である。43・44は胴部から底部であり底面は木葉痕が見られる。43は粘土継ぎ目と粘土のダレが確認できる。43は小型だが、44は大型で器壁も厚い。内面は黒変している。45は土師器鉢で製塩土器である。内外面ともに風化しているが、内面には布痕が残っている。46は須恵器壺で口縁部から頸部の残存である。内面には灰がかぶる。47は土師器甕で胎土に小石が目立つ。意図的かは不明であるが、口縁部の一部が下方に折れ曲がっている。粘土継目と粘土のダレが確認できる。48は須恵器の蓋で天井から口縁部が残る。つまみは貼り付けてあり、中央が若干膨らむ。口径も10cm程度と小さく器壁も薄い。壺の蓋と思われる。



第12図　片瀬原遺跡出土遺物実測図②（S＝1／3）

表1　片瀬原遺跡出土土器観察表

番号	種別	部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
2	土師器甕	口縁 ～胴部	SA2	20.8			横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	1～4mmの小石を含む	
3	土師器坏	口縁 ～胴部	SA2	11			ナデ	ミガキ	橙	橙	1mm以下の黒色微細粒が多く含まれている　1mm程の無色透明の光沢粒もわずかに見られる	
4	土師器坏	口縁 ～底部	SA2	17	7.4	4.6	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	黒色や暗褐色の微細な砂粒を含んでいる	ヘラ切り底
5	土師器甕	口縁 ～胴部	SA3	25.4			ハケメ　ナデ	胴部:ケズリ 口縁部:ナデ	橙	橙	1～4mmの小石を含む	埋甕
6	土師器坏	口縁 ～胴部	SA3	14			横ナデ？	横ナデ？	黄橙	黄橙	精良	
7	土師器坏	口縁 ～胴部	SA3	12.3			横ナデ ミガキ	ミガキ	浅黄橙	橙	1mm大の白色不透明の鉱物粒をわずかに含む　微細～2mm大の赤褐色の岩片をわずかに含む	
8	須恵器蓋坏	天井 ～口縁部	SA3	12.2			ナデ	ナデ	灰黄	黄灰	精良	
9	土師器甕	口縁 ～胴部	SA3				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい灰黄	1～5mm大の赤褐色の岩片を含む	
10	須恵器 長頸壺	口頸 ～胴部	SC3				横ナデ	口頸・胴部:横ナデ 頸部:斜方向の当て具痕のち横ナデ	褐灰	褐灰	精良	
11	土師器坏	口縁 ～底部	SC3	13.4	6.6	4.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な白色半透明の鉱物粒をわずかに含む　微細な黒色鋭光沢で角柱状の鉱物粒を極わずかに含む	ヘラ切り底
12	土師器甕	口縁 ～胴部	SC3	13.8			ハケメ　ナデ	ナデ　指おさえ	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の灰白色の岩片がやや多く含む	
13	須恵器坏身	口縁部	SC4	8.2			横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	白色の微細な鉱物粒を含む	部分的に自然釉がかかる
14	土師器坏	口縁 ～底部	SC4	11.8	7.5	4.7	横ナデ　ケズリ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	0.5～1mmの砂を含む 3～4mmの小石を含む	胴部の一部はケズリか？
15	須恵器	胴部	Ⅰ				横ナデのち波状文・沈線・刺突文	横ナデ	褐灰	褐灰	精良	
16	須恵器長頸壺	口縁 ～頸部	Ⅱ	10			横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	1mm程の砂を含む	口縁部に沈線を施す
17	土師器坏	口縁 ～底部	Ⅱ	13.2	7.8	3.3	横ナデ　ケズリ	横ナデ	橙	橙	精良	ヘラ切り底
18	土師器甕	頸部	Ⅱ				ナデ 斜方向の沈線	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	微細な橙色・黄白色・半透明の粒子を含む	頸部に沈線を施す
19	土師器坏	口縁 ～胴部	Ⅱ	14.7			ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	1mm以下の光沢のある透明粒・黒色粒をわずかに含む	
20	土師器壺	口縁	Ⅱ	14.5			回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な灰色の砂粒をわずかに含む　1mm大の無色透明の鉱物粒を極わずかに含む	
21	土師器甕	口縁部	Ⅱ	22.8			指ナデ	ハケメ ナデ	浅黄橙	橙 にぶい赤褐	微細な黒色・赤褐色の岩片を含む 1～2mm大の暗赤褐色の岩片を極わずかに含む	
23	須恵器皿	口縁 ～底部	Ⅱ	14.4	9.4	2.4	回転ナデ	回転ナデ	灰	オリーブ黒	微細～2mm大の白色砂粒を含む	
24	須恵器坏	口縁 ～底部	Ⅱ	15	9.1	4.0	回転ナデ	回転ナデ ケズリ	灰白	灰白　灰	精良	ヘラ切り底
25	須恵器壺	胴～底部	Ⅱ				横ナデ	横ナデ	灰白	褐灰	微細な黒色粒を含む	外面に自然釉が付着している。 高台部欠損
26	須恵器坏蓋	つまみ ～天井部	Ⅱ				横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	微細な白色粒をわずかに含む	
27	青磁鉢	口縁 ～胴部	Ⅱ	13			全面施釉	全面施釉	緑灰	緑灰	微細な透明・黄色粒を含む	
28	土師器甕	口縁部	Ⅱ	27.3			横ナデ 沈線	ハケメ ケズリ	にぶい黄橙 橙	橙	1mm大の黒色鈍光沢の鉱物粒をわずかに含む　微細～3mm大の灰色、褐色の岩片を含む	

表2　片瀬原遺跡出土土器観察表

番号	種別	部位	出土地点	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
29	須恵器甕	胴部	Ⅱ				タタキ	タタキ ナデ	灰	灰	精良	内面の当て具痕は縄目の様な文様である
30	土師器甕	口縁部	Ⅱ	22			横ナデ	ハケメ　ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm～1cm大の褐色の岩片を含む 微細～2mm大の灰白色の岩片をわずかに含む	
31	土師器甕	口縁 ～胴部	Ⅱ				ナデ	ナデ	橙	橙	1～4mmの小石を含む	
32	土師器鉢	胴部	Ⅱ				ナデ	布痕	橙	橙	3mm程の小石を含む	製塩土器
33	土師器甕	口縁 ～胴部	Ⅱ				ナデ	工具によるナデ 指押さえ？	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1～4mm程の小石を含む	
34	土師器甑	把手	Ⅲ						にぶい黄橙		4mm以下の褐色粒を多く含む　2mm以下の光沢透明粒をわずかに含む	
35	土師器甕	口縁部	Ⅲ	26.7			指おさえ ナデ(タテ　ヨコ)	横ナデ	橙	にぶい橙	1mm程の無色透明粒を含む 1～2mm大の褐色、黒色、乳白色粒を多く含む	
36	土師器坏	口縁 ～底部	Ⅲ	12.8	4.4	4.2	横ナデ	横ナデ	橙	橙	微細な黒色粒を含む	
37	須恵器甕	頸 ～底部	Ⅲ				頸～肩部の一部: 横ナデ 肩部:タタキ　ナデ	頸部:横ナデ 肩部:タタキ	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	
38	土師器椀	口縁 ～底部	Ⅲ	15.1	3.6	4.8	ミガキ	ミガキ	橙	橙	精良	
39	須恵器甕	頸～胴部	Ⅲ				タタキ	横ナデ	灰黄	灰	微細～1mm程の黒色粒を含む	自然釉がかかる
40	土師器高坏	脚柱部	Ⅲ				工具によるナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	2mm以下の暗赤褐色粒 1mm以下の黒色粒を多く含む	
41	土師器椀	底部	Ⅲ		6.8		回転ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	1mm以下の光沢透明粒、黒色粒をわずかに含む	底面回転ナデ 貼り付け高台
42	土師器甕	底部	Ⅲ		6.2		ナデ	ナデ	橙　黒 にぶい黄褐	橙　黒	1mm大の黒色粒を多く含む 1mm以下の無色透明粒を含む	木葉痕
43	土師器甕	胴 ～底部	Ⅲ		7.4		ナデ	ナデ	橙　黒褐	にぶい黄橙 黒	3～4mm大の褐色、黒色の岩片を含む 1mm大の透明粒をわずかに含む	木葉痕
44	土師器甕	胴 ～底部	Ⅲ		9.2		ナデ　一部ケズリ 指おさえ	指押さえ 横ナデ	にぶい橙	黒褐	1～5mm程の小石を含む	木葉痕
45	土師器鉢	口縁 ～胴部	Ⅲ				指おさえ	布痕	橙　黄灰	橙	1～3mm大の岩片を含む	製塩土器
46	須恵器壷	口縁 ～頸部	Ⅲ	10.4			回転ナデ	回転ナデ	黄灰	灰白　明黄褐 灰オリーブ	精良	内面:灰かぶり
47	土師器甕	口縁 ～胴部	Ⅲ	12.6			ナデ	指押さえ ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1～4mm程の茶褐色の小石を含む	
48	須恵器蓋	天井 ～口縁部	Ⅲ	8.8		2.3	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	精良	つまみ部 貼り付け

表3　片瀬原遺跡石器及び土錘計測表

番号	器種	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	砥石	SA1	6.2	3.5	3.8	135.4
22	土錘	Ⅱ	3.7	1.3	1.3	3.95

第Ⅳ章　まとめ

今回の発掘調査では、竪穴住居跡６軒、土坑２基、溝状遺構１条、ピット22基が検出された。60㎡という限られた面積であったため、竪穴住居跡全体を検出し完掘することが出来なかったが、石崎川右岸の砂丘上に集落跡が存在していたことが確認された。

竪穴住居跡６軒のうち、調査区西側で検出された３軒では切り合いが見られなかったが、調査区東側では３軒の竪穴住居跡が切り合っており、建て替えが行われたことを示している。土層断面図からは貼床を施していた痕跡も認められた。

竪穴住居跡の中には、遺物が伴わなかったり、細片の出土で遺構年代を特定できないものもある。一方、２号竪穴住居跡・３号竪穴住居跡では埋土中から多くの土器が出土しており、他の住居跡とは違いが見られる。その中で３号竪穴住居跡では埋甕に使用された土器が出土した。埋甕として使用された土器は、北中遺跡Ⅲ・７号住居跡の埋甕で使用された土師器甕と同様の型態から、概ね９世紀前半と思われる。

２号竪穴住居跡・３号竪穴住居跡とも床面直上で出土した遺物がそれほど多くなく、埋土中からは破片が多く出土した。廃絶後、意図的に埋めたものか。それらと比較して床面直上や埋土中に遺物を伴わない住居跡は、その理由として再利用可能な土器を持ち出したとも考えられるが、調査区外に大部分が延伸しており完掘できていないため詳細は不明である。

また、３号土坑は検出面の高さが他の遺構とは違うため時期に若干の差があると思われるが、出土した土師器甕の型態から概ね９世紀後半と思われる。住居の構築順序は切り合いの関係から、３号竪穴住居跡→２号竪穴住居跡→４号竪穴住居跡となり３号竪穴住居跡の埋甕で使用されていた土師器甕の特徴から９世紀前半以降の構築と考えられる。３号土坑を９世紀後半と位置付けると、それらは比較的短期間で構築・廃絶・埋没したことになる。

竪穴住居跡からはピットが検出されたものの深さは浅く、規則性も見られないことから上屋の主柱穴にはなりえないものと思われる。３号竪穴住居跡のすぐ西側には直径小さいもののピットがあり、深さを考慮に入れるとこれが３号竪穴住居跡の主柱穴となる可能性もある。また、砂地に営まれた住居であり住居壁は崩落を免れないと思われるが、その保護をどのように行っていたのか疑問が残る。言い換えれば、もろく崩れやすい住居がゆえ短期間での構築・廃絶・埋没となったとも考えられるのではないだろうか。砂地に営まれた集落の調査事例は少ないため、今後、同様の調査事例の増加を待ちたい。

【参考文献】

大川清ほか　1996　『日本土器辞典』　雄山閣出版株式会社

中村浩　2001　『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』　芙蓉書房出版

南正覚雅士ほか　2003　『山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター

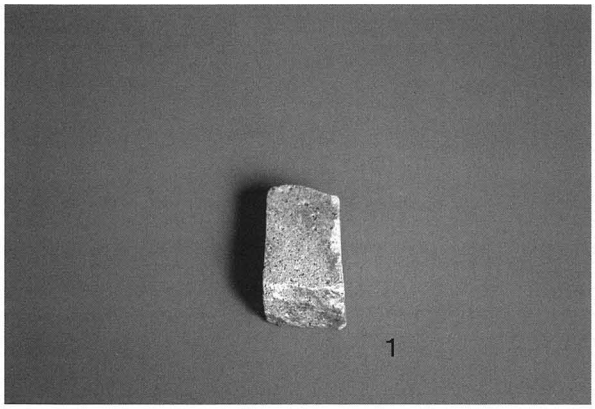
竹中克繁編　2005　『桜町遺跡』　宮崎市教育委員会

図版１　１号竪穴住居跡（ＳＡ１）完掘状況

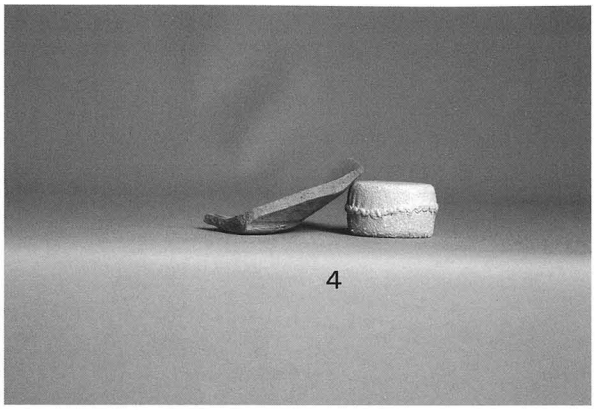
図版２　２号竪穴住居跡（ＳＡ２）遺物検出状況

図版３　２～４号竪穴住居跡（ＳＡ２～４）完掘状況

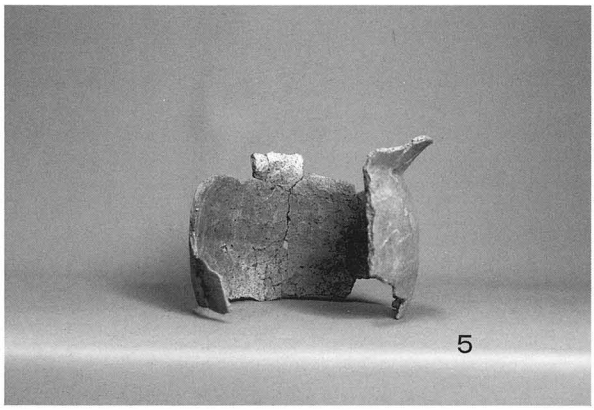
図版４　３号竪穴住居跡（ＳＡ３）埋甕



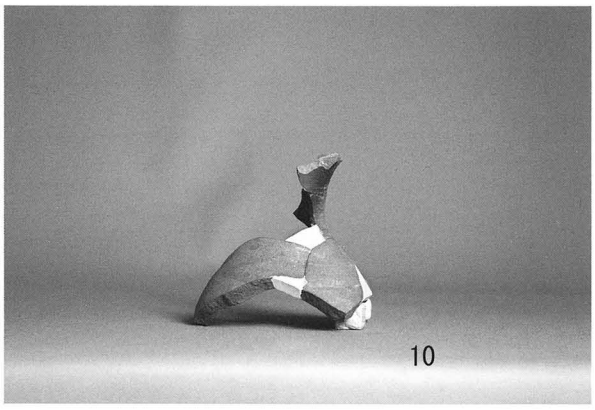
図版５　１号竪穴住居跡（ＳＡ１）出土石器



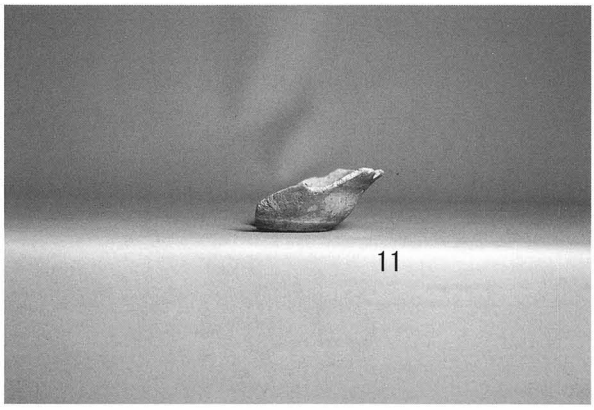
図版６　２号竪穴住居跡（ＳＡ２）出土土器



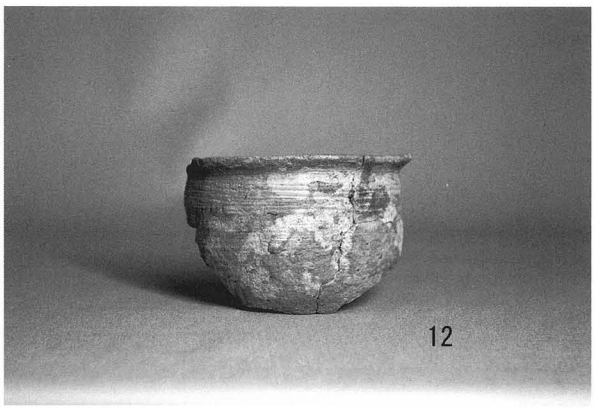
図版７　３号竪穴住居跡（ＳＡ３）出土土器（埋甕）



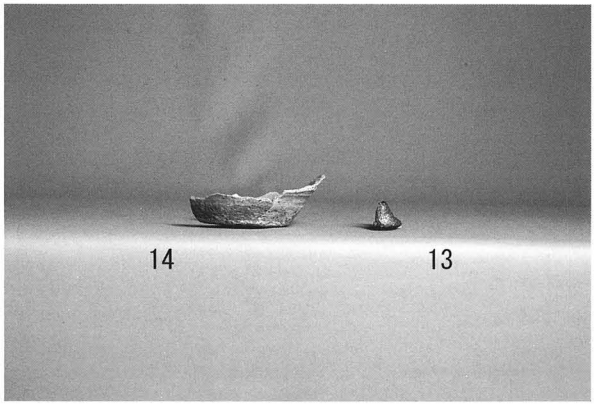
図版８　３号土坑（ＳＣ３）出土土器



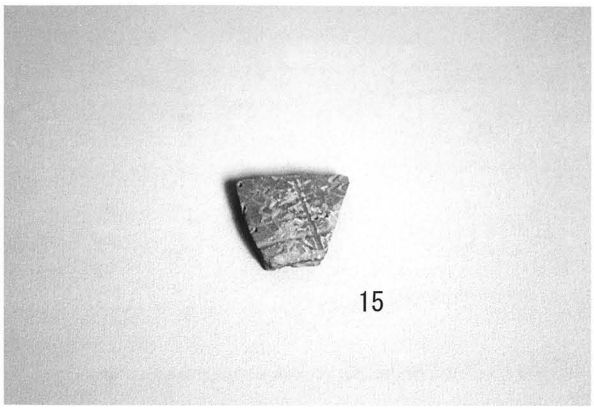
図版９　３号土坑（ＳＣ３）出土土器



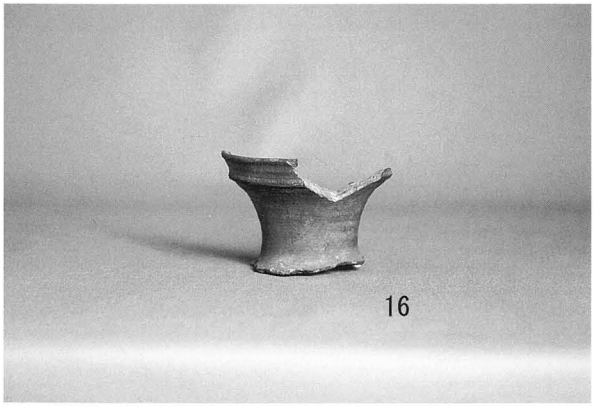
図版10　３号土坑（ＳＣ３）出土土器



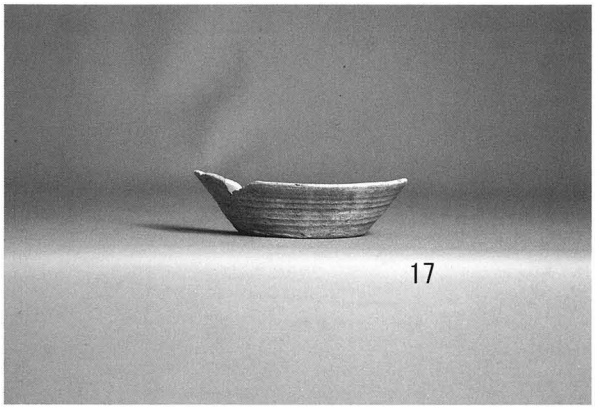
図版11　４号土坑（ＳＣ４）出土土器



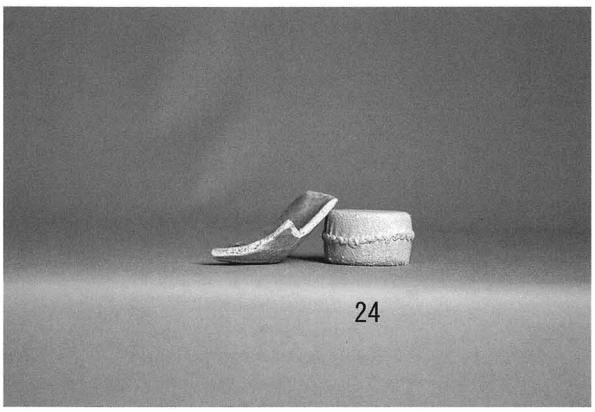
図版12　Ⅰ層出土土器



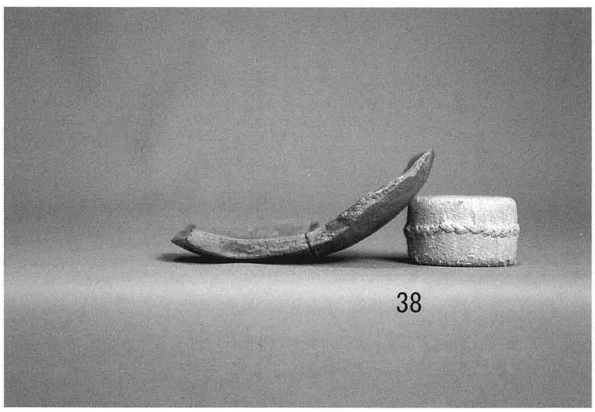
図版13　Ⅱ層出土土器



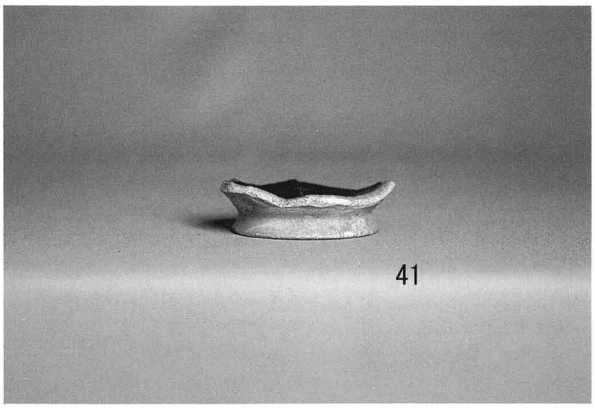
図版14　Ⅱ層出土土器



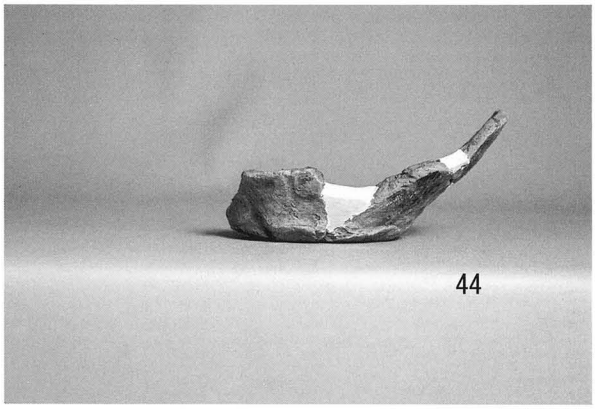
図版15　Ⅱ層出土土器



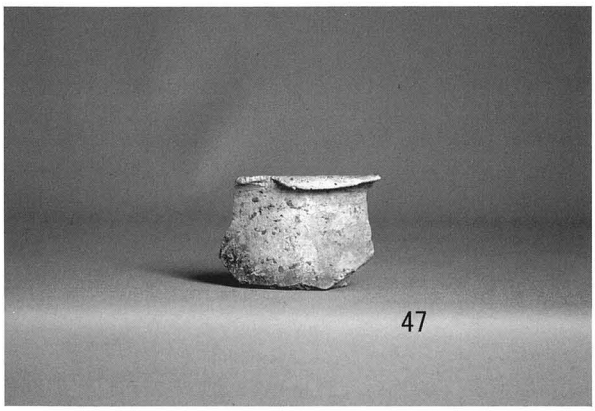
図版16　Ⅲ層出土土器



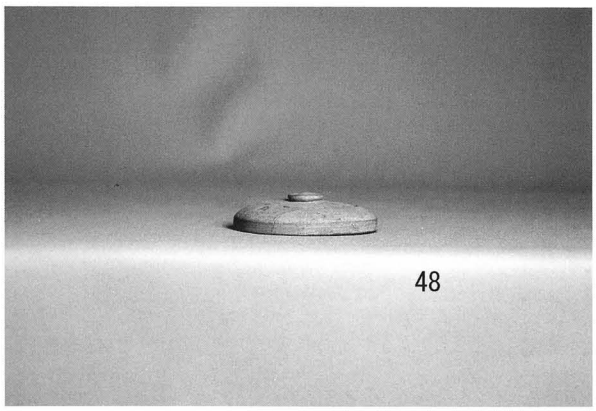
図版17　Ⅲ層出土土器



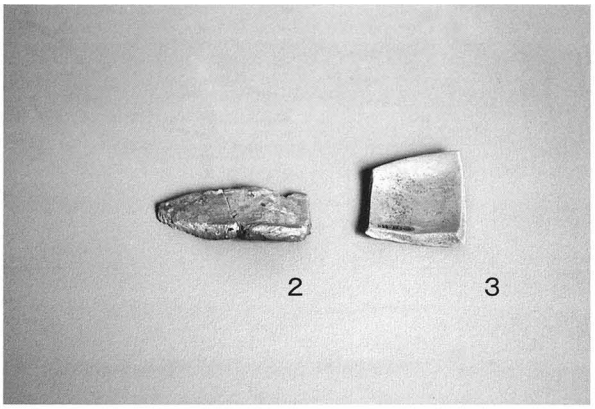
図版18　Ⅲ層出土土器



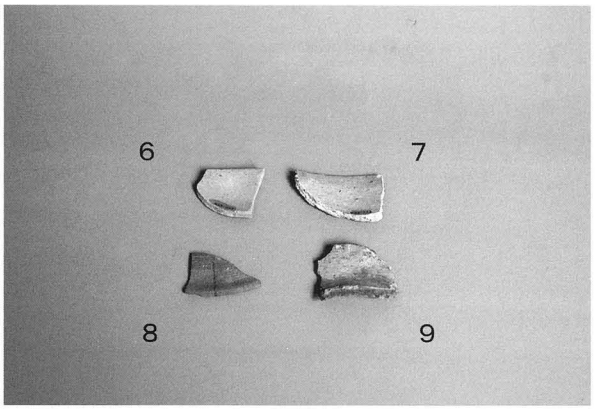
図版19　Ⅲ層出土土器



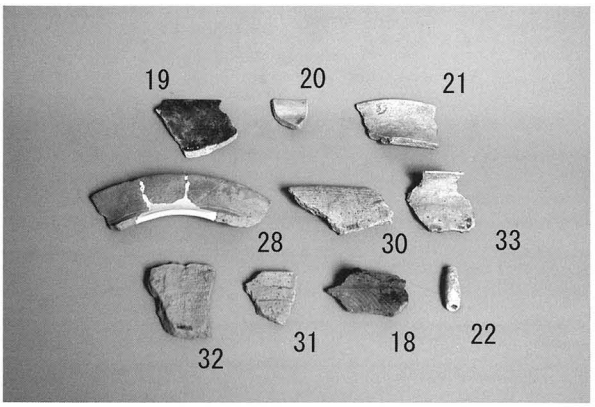
図版20　Ⅲ層出土土器



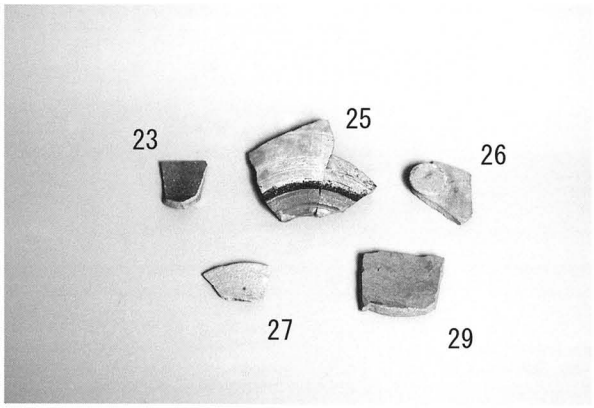
図版21　２号竪穴住居跡（ＳＡ２）出土土器



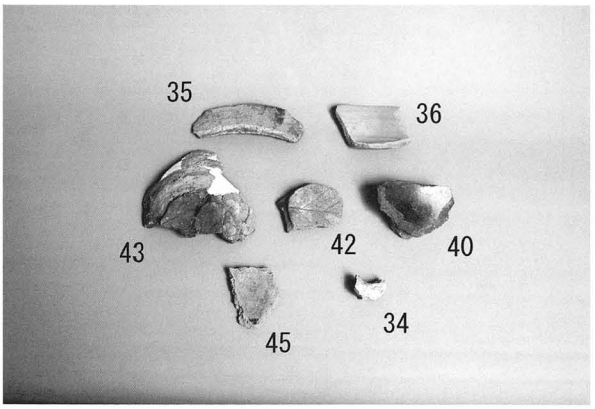
図版22　３号竪穴住居跡（ＳＡ３）出土土器



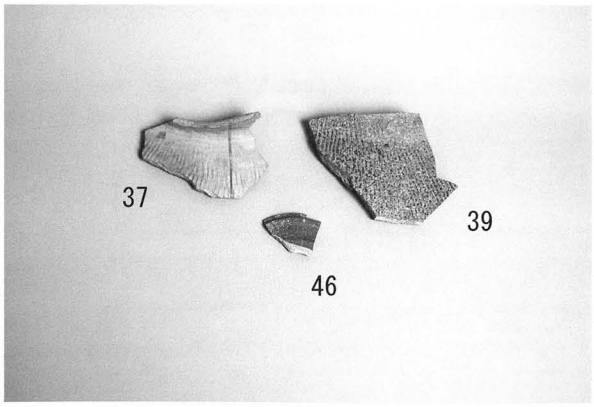
図版23　Ⅱ層出土土器



図版24　Ⅱ層出土土器



図版25　Ⅲ層出土土器



図版26　Ⅲ層出土土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	かたせばるいせき
書名	片瀬原遺跡
副書名	特別養護老人ホーム「松晃園」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第70集
編著者名	河野　雅人
編集機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880-0805　宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号　4F　TEL（0985）21-1836
発行年月日	2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
片瀬原遺跡	宮崎県宮崎市佐土原町下那珂字片瀬原	45201		32°0′5″付近	131°27′59″付近	20070604～20070622	60㎡	特別養護老人ホーム「松晃園」建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項
片瀬原遺跡	集落	古代	竪穴住居跡　土坑 溝状遺構	須恵器　土師器	石崎川右岸で集落跡が確認された。また、3号竪穴住居は埋甕をともなっていた。

宮崎市文化財調査報告書　第70集

片瀬原遺跡

特別養護老人ホーム「松晃園」建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年３月

発　行　　宮崎市教育委員会